

第三者意見

株式会社ニッセイ基礎研究所

上席研究員 川村 雅彦 氏

Profile

1976年九州大学大学院工学研究科修士課程修了、三井海洋開発(株)を経て、1988年(株)ニッセイ基礎研究所入社。現在、保険研究部門。環境経営、CSR、環境ビジネスを中心に調査研究に従事。環境経営学会(副会長)などに所属。

著書は「環境経営入門」「SRIと新しい企業・金融」「カーボン・ディスクロージャー」など(いずれも共著)。



CSRの報告について：「伝えよう」という意欲が感じられる構成

今年の冊子報告書(ダイジェスト版)の全体構成や紙面配置は簡潔で読みやすくなり、日本化薬の創立100周年に向けて、読者に「伝えよう」とする意欲が随所に感じられる。特に、CSR活動の4領域(基盤、経済、社会、環境)に対応するべく目次が構成されている。また、活動領域別にその狙いや年度目標が頁上段に整理され、代表的な取組内容がわかりやすく述べられている。

さらに、「CSR研修14回」や「重大事故・災害0件」のように、取組実績について大きな文字で数値を示したことも特徴的である。ただし、その数値が何を意味するのかが曖昧であり、昨年も提案したように、KPI(Key Performance Indicators)の導入を検討いただきたい。新たに策定された「中期CSRアクションプラン」とも関係するため、定量的なP-D-C-A運用が可能となる。現状はまだCSR活動の報告が中心である。

報告対象範囲の拡大についても従来から指摘してきたが、今年は海外を含むグループ企業の取組状況を、断片的なコラムから本文構成としたことは一歩前進である。CSR報告書として、グローバルな事業展開を反映するべく視野を広げたことは評価できる。

なお、CSRのグローバル・スタンダードであるISO26000との対照表が記載されたことも評価できるが、まだ表面的な印象は否めない。7つの中核主題(実践領域を示す大項目)ではなく、37の実践課題(中項目)レベルでの更なる吟味が必要である。

CSRの内容について：グローバルCSR経営への飛躍を

日本化薬グループのCSR経営の第二期が始まろうとしている。今年度から始まる3か年中期事業計画(Challenge 100A!)と連動させた、これまでの単年度ベースを超えた「中期CSRアクションプラン」の4領域24項目が新たに策定されたからである。このこと自体は評価できるものの、いくつかの課題が指摘できる。

一つには、このアクションプランの適用範囲が曖昧である。内容的には日本国内での事業を前提としているように見えるが、まずは本体ならびに国内グループ会社が対象であろう。しかし、昨年のトップメッセージにある「グローバルにCSR経営を推進」を踏まえると、今後、海外事業への浸透をどのように進めるかがより重要である。

既に海外に多数の製造拠点と従業員を有し、多角的な事業を行っている日本化薬は、国内と海外では社会的課題が大きく異なることを認識し、取組の優先順位が違うことに留意するべきである。近年、日本企業の海外現地法人やその調達先が、人権・労働や汚染などの問題でNPOなどから突然指摘され、トラブルを抱え込むケースが増えている。

つまり、海外サプライチェーンのCSRリスクが顕在化してきたのである。これと関連して、「グリーン調達からCSR調達へ」を模索する中で、CSR調達基準の策定は当然であるが、調達部門による海外現場での"CSR監査"も視野に入れておく必要がある。

そのためにも、株主価値の向上という狭義のガバナンスではなく、社会的責任を果たすための意思決定プロセスやシステムを経営戦略として構築する必要がある。大いに期待したい。